INFORMATION

COMMONS FESTA 2000 コモンズフェスタ2000
いよいよ11月4日からスタート!!

「LIFE—これが、私たちの生きる力!」

前号でもご案内しましたが、毎年秋の恒例事業「コモンズフェスタ2000~LIFE」が、いよいよ11月4日から開催されます。

このフェスタは、應典院を舞台に、地域コミュニティの再構築を願って開催している、NPO(民間非営利組織)の合同フェスティバル。さまざまな出会いから、誰もが自由にいまを問い直し、つながり合っていく……そんなきっかけに、きっとなるはず。みなさんのご参加をお待ちしています。

コモンズフェスタ2000関連企画
多様な生き方~NPO(仮)

毎年秋の恒例事業となった<コモンズフェスタ>。3回目を迎える今回は、新しい試みとして"モニターボランティア"を募集します。

参加者という「お客さま」ではなく、各NPOの現場を内側から体験することで、「市民とは何か?」「これからの自分は?」といったことを自分事として考えるきっかけづくりをねらいとするものです。

モニターたちがコモンズを通して見たこと・感じたことは何なのか?また、「生き方のひとつの選択肢としてのNPO」の現在の位置づけは?

みなさまのご参加をお待ちしています。

◆と　き:12月2日(土)
14:00~16:00
◆ところ:應典院
◆ゲスト:実吉威さん
(市民活動センター・神戸代表)
三並高志さん
(立命館大学キャリアセンター)
※大阪コミュニティ財団助成事業

第25回寺子屋トーク
お墓の行方は?

第25回の寺子屋トークは「お墓の行方大論争!」、11月12日(日)に、コモンズフェスタ2000記念シンポジウムとして開催されます。昨年のコモンズフェスタでの「日本人の死に方」の第2弾です。

いつ訪れるかわからない自分の死。お決まりの、あるいは"立派"な葬式や墓は不要だと考える人が増えています。それに伴い、家族葬、散骨・自然葬、生前契約等々、「自分らしい最期」を望む人々の声が活発になっています。

ゲストに、葬送ジャーナリスト・碑文谷創さん、宝塚NPOセンター事務局長・森綾子さん、佛教大学助教授・村岡潔さんをお迎えし、コーディネーターを秋田住職が務めます。

本格的な長寿社会、納得のいく最期をどうしたら迎えられるのか、私たちの最後の「自己実現」について語り合います。

詳細については、同封のチラシをご覧ください。

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

第4回　10月19日(木)
「死別へのこころの準備」

話題提供者
大阪生と死を考える会々長
谷　荘吉さん(医師)
◎時　間:午後6時30分~
◎参加費:500円
◎会　場:應典院
お申し込みは事務局まで。

【新入会員ご紹介】
(2000年10月15日まで)

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
秋田　佳津　大阪市北区
【和歌山県】
菅野　雅光　御坊市
○学生会員
【三重県】
黒木　利作　伊勢市

サリュ VOL. 22
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発行日　2000年10月16日
(偶数月発行)
編集人　池野亮、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL06-6771-7641
FAX06-6770-3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

[サリュ]
フランス語で救いの意

2000 OCTOBER
vol.22



木村佳友さん(兵庫県宝塚市、コンピューター・プログラマー)と暮らす介助犬シンシアは、取材などで何度も同じ指示を出されると、うんざりしたように動作が鈍くなるのだとか。出された指示を無条件に実行するのではなく、木村さんが困っているかどうかを自分で判断するシンシア。役に立つだけではなく、"生きたコミュニケーション"ができる相手だからこそ、木村さんにとってかけがえのない存在なのだろう。「心のつながり」を考えるとき、シンシアから学ぶことは多そうだ。

REPORT

お寺からはじまる、新しい学校づくり！
もうひとつの学びの場について考えよう
——寺子屋NPO緊急アピール！

有名な経営学者ドラッカーは、NPOを取り扱った名著『非営利組織の経営』(ダイヤモンド社)という本の日本語序文の中でこう書いています。

「いまも機能している最古の非営利機関は日本にある。奈良の古寺がそれである。創立の当初からそれらの寺は非政府の存在であり、自治の存在だった」。

お寺は元祖NPO。かつては教育、福祉、芸術文化といった公共の役割を担い、広く日本人の生活文化に根づいてきました。その役割の独自性とは何だったのか、今日の視点を織り込みながら、考えていきたいと思います。

学びと癒し、楽しみの原点

仏教が日本に伝来したのが、ざっと1500年前。その頃から仏教は寺院という「場」を開いて、積極的な社会事業に取り組んできました。

たとえば「学び」。日本で初めて庶民に開かれた学校は、あの空海が開校した綜芸種智院といわれています。また、江戸時代、世界でも指折りの、文字の読み書き能力の高さを支えたのは、最盛期には5万カ所あったといわれる寺子屋でした。「癒し」の分野では、仏教伝来の地・四天王寺が、最初に病院や薬局を開いて病人を収容したことは有名ですし、中世には私度僧といって、いまで言うソーシャルワーカーのような聖が多く活躍しました。

「楽しみ」においては、昔の芸能の大半は神仏に対する奉納芸として発達しますし、寺の境内が特設舞台になって、数々の芸能が演じられたのも有名な話です。

しかも、これらの役割は権力によって導かれたものではなく、寺院と檀家、庶民が協働して作り上げた、きわめて独立性の高い“公共文化”だったといえるでしょう。

このように3つの要素、今日的にいえば「教育」「福祉」「芸術文化」の原点がお寺にあったことは意外に知られていません。むしろ明治時代に入って、国家が進めた政策と制度化の影に隠れ、これらは「前近代的なもの」として忘れ去られていったのでした。

師弟の対話を重視した寺子屋

教育を例に考えてみましょう。

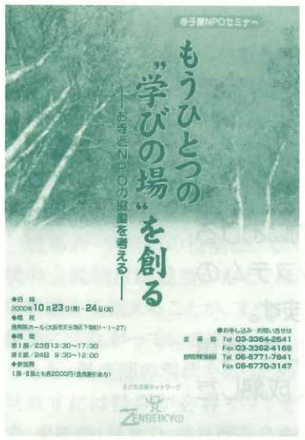
現在の学校制度の原点を寺子屋に求める説がありますが、それは間違いです。

明治政府が進めた西欧型学校教育とは、軍隊教育をモデルにしており、もっとも重んじられたのが効率性であり合理性でした。通年の教育課程、一斉授業、相対評価等々、現在も続くこの形式は、すでに130年以上にわたって引き継がれてきた制度でした。

しかし、寺子屋にチャイムがあったわけではありません。登校時間はまちまち、机はバラバラに配置され、授業はあくまで先生と生徒(師弟)の一対一による「手習い」が原則でした。もちろん偏差値があるわけではなく、生徒は一人ひとりが評価を受け、個人の能力に応じた指導が保証されていました。いわば、個人とのていねいな対話の上に寺子屋教育は成り立っていた、といってよいでしょう。



男の子だけの寺子屋　読み方を教えているお師匠さまと、勝手な方に机を向けている子供たち。渡辺崋山画「一掃百態」より



近代学制によって寺子屋は消え去りましたが、昭和の初期まで地方でしぶとく生き残っていたという記録もあります。お上が作った学校ではなく、おらが村の学校、つまりコミュニティ・スクールの本質が、寺子屋にあったという証左といえましょう。

日本でもはじまる学校の多様化

いま、日本の教育が大きく揺れています。いじめ・引きこもり・少年犯罪の凶悪化等々の記事が新聞に掲載されない日はありませんし、それに呼応するように教育改革・総合的な学習・教育基本法の見直しまで、かまびすしく議論が交わされています。

しかし、学校という一元的な場所に責任を求めるかぎり、問題はけっして解決しません。教育の問題とは、学校のみならず家庭や地域、あるいは教師や親、すべての子どもと大人の問題であるからです。問題を特定の人や制度に押しつけるのではなく、広く社会全体のものとして受け入れて考えたとき、私たちにはまだ多くの可能性が残されているはずです。たとえば、アメリカのチャーター・スクールのように、日本でも地域の人々が学校づくりに関わって、コミュニティ・スクールや市民立の学校創設などに取り組めば、子どもたちが自分の学ぶ場を選ぶことができます。こういった「オルタナティブ(もうひとつの)教育」は、硬直化した学校教育を打ち破る、新しい試みとして大きな期待を集めることでしょう。

お寺＝もうひとつの学びの場

「現代の寺子屋とは何か」をテーマに、来る10月23日の寺子屋トークでは、「もうひとつの学び」について語り合います。

ゲストは、ホリスティック教育の提唱者のひとりである吉田敦彦さん(大阪女子大学助教授)、フリースクールの草分けとして知られる東京シューレの奥地圭子さん、そして應典院寺町倶楽部副理事長の榛木恵子さんの3人、そしてコーディネーターとして今回の共催相手である全国青少年教化協議会(略称:全青協)の神仁プログラムオフィサーが加わります。

前段で述べてきたような教育の現状と、かつて機能した寺子屋の役割をもう一度再評価しながら、さらにお寺の中の学校づくりを具体的に考えてみようというものです。全青協では、お寺がフリースクールを開くことを想定して、開設マニュアルも周到に用意されています。

「寺子屋文化とは、オルタナティブな教育の原点。すでに全国で宗派を超えて、学校づくりに取り組むお寺も登場していますし、中でも應典院さんは、大人と子どもがいっしょに学べる都心型の学校として、範となっています。場を持つお寺と、仕事をするNPOが上手に結び合って、新たな学校興しのヒントとなれば」と、全青協の神さん。当日は大阪府下のお寺の関係者と、教育問題に取り組むNPOスタッフが一堂に会します。

寺子屋をいまに再生するということは、これまでの学校教育のあり方に、オルタナティブな提案を投げかけるということ。「ダメだ」というばかりではなく、自分たちの手で可能なことを、具体的にていねいに説き明かしていく必要があります。もちろん、既存の学校や教員、PTAともパートナーシップをとりながら、協働していくことが肝要でしょう。歴史的に地域文教の中心にあったお寺が、そのつなぎ役として機能することは、けっして領分外のことではないはずです。

應典院の試みはまだ端緒についたばかり。けれど、それぞれの地域に根づいたお寺の潜在力はまだ無尽蔵なものがあります。元祖NPOとしてのお寺の原点を、いまに問い直し、新しい教育の潮流となることを願いたいものです。

第24回寺子屋トーク

もうひとつの“学びの場”を創る

～お寺とNPOの協働を考える～

◆と　き：10月23日(月)
　※13:00 受付開始
◆ところ：應典院本堂ホール
◆参加費：2000円
　※倶楽部会員は1000円
◆講　師：吉田敦彦(大阪女子大学助教授)
　奥地圭子(東京シューレ代表)
　榛木恵子(関西NGO協議会事務局長)
◆主　催：應典院寺町倶楽部
　(財)全国青少年教化協議会

◆プログラム
13:30 レクチャー
　【知る】
15:00 休憩
15:15 事例報告
16:00 パネルディスカッション
　【考える】
17:30 終了
18:00 懇親会

さらなる飛躍へ向けて……
成熟したNPOへの胎動

1998年12月に「特定非営利活動促進法」が施行、日本国内におけるNPOの動きがより活発になってきました。現代社会のシステムの中で、新たな担い手としてNPOの活躍が期待されています。寺町倶楽部も第4期を迎え、6人の新たな理事をお迎えして、理事会と事務局が一体となって3年間の活動をふり返りつつ、成熟したNPOへ向けての地歩を固めるために、動き出しました。

日本のNPOの現状は

日本でもようやく、NPOが社会認知度を増し、市民の力が政治や行政を動かすまでになりました。

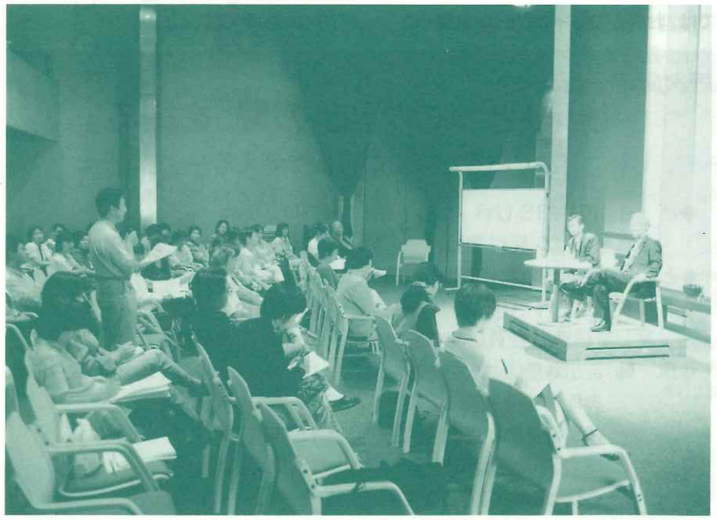
私たちは、社会のさまざまな問題を政治や行政に依存して解決しようと考えがちですが、明治以来の中央集権的国家・社会システムはいたるところでほころび始め、社会システムの再構築が求められています。

市民運動、NPOの活動は、まだまだ行政や企業に対抗する社会セクターを形成するまでには至っていませんが、やがては組織化、制度化され、多様な社会サービスを提供するまでに成長し、活力ある社会を作り出す原動力となることでしょう。

現在、数多くのNPOが社会のさまざまな課題や問題に対して行動し、提案し、解決に向けて動いています。しかし現状としては、ほとんどの団体が活動基盤の整備が不十分であり、その課題の解決が急務です。

NPOの発展に必要とされる要素として、資金・人材の充足・社会的認知・組織マネジメントの向上などが考えられます。

寺町倶楽部でも、上記要素それぞれに課題を抱えています。第4期を迎えた今、その課題解決に向け、動き出すことが必要です。



そこで、それらの課題解決へ向け、新体制になった理事会が活動を始めました。

倶楽部の本質を問い直す

第1回目の理事会は8月1日に開催、7名の理事のみなさんにご出席いただきました。

「社会における倶楽部の役割と存在の意味は何なのか、今後の活動のあり方は……」と、根本的な質問が冒頭から投げかけられました。

たしかに、應典院の再建と同時に倶楽部が発足、NPOとしてのミッション(使命)や目標が、抽象的なままスタートした感は否めません。しかし、3年間の積み重ねがあればこそ、見えてきたものがあり、それを具体的に話しあうことができるのだと考えます。

コア事業として、「寺子屋トーク」、「コモンズフェスタ」、「舞台芸術祭」が定着、各方面から高い評価をいただいています。しかし、会員数は最大時の300名が、現在では160名程度となっています

「過去の目標や事業、事務局運営に対する達成度や評価など、具体的データをもとにした議論が必要ではないか。今までをきちんとふり返ることで、今後の方向性が見えてくるのだから……」

「目標や理事の役割、会員制度のことなどは別々に論じられるものではなく、すべてがつながって検討されるべき課題ではないか」

当面の話し合うべきテーマとして、「組織・運営について」と確認されました。

理事会・事務局の役割として、現状の会員制度は妥当かなど、身近な課題を見据えることが、すべての課題につながっていきます。

ただ、倶楽部の現状をあらためて見直すには時間が必要です。そこで、来年の1月まで、毎月理事会を開催し、ひとつの結論を導き出すことが決定されました。

理事のみなさんの積極的な姿勢は頼もしく、自立したNPOへ向けてスタートしました。

明日に向かって

第2回目は9月12日に開催。5名のご出席でしたが、いよいよ本格的な議論が始まりました。事務局より、現状の問題点を提示、今後のスケジュールを確認しました。

「現状の問題点から、早期的なものと長期的なものを分けて考える必要があるのでは。すべてを1月までに決着させるのはむずかしい。早期的に解決すべきものを目標にすべき」

「早期的なものとしては、運営体制・会員補強・会則変更など。長期的なものとしては、事業計画・収入源の確保などではないか。会員補強・会則変更を考えれば、すべての課題と絡んでくるはず」

「ただ、話し合っていく前提として、理事、理事会の役割について明確にすべきではないか。理事がどのような責任をもつのかによって、進め方も、話し合う内容も変わってくるのでは」

さすがに、各方面で活動をされている方々、問題解決へ向けて、前向きなご意見が次から次へとでてきます。しかし、1月までの限られた時間の中、すべての課題に対する明確な回答を見いだすのは困難かもしれません。

ただ、社会の中で確実な一歩を踏み出すために、今がたいへん重要な時期であることはまちがいありません。これからの議論の中で、倶楽部の将来像を、理事会、事務局が一体となって、作り上げていきたいと考えています。



VOICE ボイス

今回のVOICEは、名畑孝さん。名畑さんには発会のときから倶楽部の理事を務めていただいています。現在、老人医療に携わっておられ、「老い」「死」について考える機会が多いとのこと。3年間の寺町倶楽部の活動と、名畑さんが仕事を通して感じておられることについてお聞きしました。



私の仕事は医師で、老年内科を専門としています。そのため年配の方々との関わりが多く、死にゆく人々を看取るうちに、いかに生きるべきか、自分らしい生き方を考えたいと強く思うようになりました。

「自分らしい生き方」と一言で言っても、なかなか見つけにくいものでしょう。物質的な充足を求めすぎたために精神的な豊かさが失われている現代社会で、人々は自分の生きる目的を見失っているように思います。私は仕事で患者さんと接し、どうしたら豊かな老年を過ごせるのかを模索しているのですが、これは私の生き方を模索することにつながっています。豊かな老年を迎えるために、それまでの生き方が大切でしょうから。

生き方を考えるには死と向き合うことも大切です。なぜなら、生と死はつながっているものだからです。ところが現在は三世代同居も減少し、家で死を看取ることが少なくなってきており、身近に死を感じることはできません。こんな状況で若い人が死について考えることはむずかしいですよね。次の時代を担う若者にきちんと死と向き合ってもらい、自分らしい生き方を考えてもらいたい、そのためのきっかけづくりができればと思います。

若い人たちが死と向き合うために、應典院で毎月催されている「いのちと出会う会」はうってつけです。日頃、たくさんの若者が應典院に出入りしていますので、この会の活動を知ってもらい、どんどん参加してもらいたいと思っています。

この3年間で感じたことは、活動している人が興味をもったものに積極的に関わってきているということですが、人と人とが出会い、ぶつかり合える場が應典院です。いろいろな経験をした人が集まることが特徴ですので、自分たちのネットワークを他のものと結びつけてゆくことで貢献できれば、と私は思っています。

CLUB TOPICS

NPOインターンシップ・プログラム

大学との新しいコラボレーション（協働作業）!!

9月1日～20日、立命館大学の3回生、後藤史さんと影谷かおりさんのお2人をインターンとして受け入れました。現役の学生さんをインターンとして迎えるのははじめての試みです。20日間のうち実際に通ってきたのは約10日ですが、片道2時間かけて通ってきてくれた彼女たちは、何を見、何を感じたのでしょうか。

インターンシップを経験して

立命館大学　後藤　史

不思議な場所＜應典院＞



應典院でのインターンシップで最初に感じたことを一言で表せば、「不思議な場所」だということです。建物自体の空間的なことはもちろん、ここに集まってくる人々の社会的な立場・年齢・構成・役割など、これまでには経験したことのない空気と時間の流れのある場所で、とてもおもしろいと感じました。また、「お寺を巡るのが好き」という個人的な趣味もあり、建物内外にお地蔵様やご本尊などが置かれていることも、京都からはるばる通ってくる気力を与えてくれ、たどりつくと落ち着かせてもらえる場所でした。もし営利を目的にした一般的な企業でインターン経験をしていたらと考えると、とてもいいところに来られたと思います。

個人的に、進路にアートマネジメントを考えている立場から言えば、インターン期間中の私の実力と時間の不足のため十分にとは言えないまでも、アートマネジメントの現場の空気に触れられたことがいちばん大きな成果でした。應典院ではアートだけでなく、自閉症の子どもたちなどを対象にケアを行っていますが、インターンシップ以前の私の頭には、そういったアート以外のものを同時に行うという視点に欠けていたので、そこに気づけただけでも大きな収穫だと思っています。

出会いと対話から気づいたこと

20日間という期間中、のべ10日ほどしか通えなかったのですが、それでもずいぶん多くの人にお会いすることができたことも、應典院に来た甲斐があったと言えます。ほとんどの方とは個人的にお話することはできませんでしたが、それでもNPOとして活動・活躍していらっしゃる方や、またそうでなくても應典院に関わっている方たちの多彩な顔ぶれを知ることができて、社会勉強になりました。その中でも個人的に話をさせていただいた方々からは、これまでの仕事での体験談や、NPOというまだまだ開拓中の分野ならではの苦悩といったまじめな話から、おいしいチャイの作り方といった実用度の高い話まで、いろいろな話を聞かせていただくことができました。

また、私はこれまでアルバイトの経験をしてきた中で、どうしても正スタッフとラインを引いた扱いをされることに不満を感じてきました。そんな私にとって、役不足ながらもバイトよりは一歩進んだスタッフの一員として扱っていただいたという点で、特別な意味のある経験をさせていただけました。日常的な業務を含めたあらゆる点で、自分に足りないものが山ほどあることや、社会人の大変さを改めて認識できました。

変わらないもの、変わりたい私

そして、「町の人々が他の場所へ移っていっても、私たち應典院はいつまでもここにいるし、いたいと思う。誰かが何年か後に再度ここを訪れたときにも、変わらずに存在している應典院でありたい」とおっしゃった住職の言葉が印象に残っています。いま一人暮らしをしている分、"帰る場所"というものに敏感になっているせいかも知れませんが、そう思える場所があるのとないのとでは、普段の生活の中でもあらゆる場面で、たしかに何かが違うと思います。これまであまり深く考えてこなかったことなので、これを機に少し時間をかけて考えたいと思っています。

今回、のべ10日間で体験できたことは、今年の夏という"いま現在"でしかもちえない価値があり、現在の私だからこそ必要な体験だったと感じています。ただ一つ、「場所が京都市内だったら……」というかなわぬ願いはありましたが、とても貴重で楽しい経験をさせてもらえたこと、応募締め切りが延びた結果という偶然に助けられたこと、今回出会えた方みなさんに感謝しています。そして、「いつかこのお返しができるとき」と「お返しできるように自分自身が成長するとき」がくれば、と思います。

秋田住職発 應典院掲示板

9月の約一カ月間、立命館大学から要請があって、インターンの女子学生を2名受け入れました。これまで経験はあるものの、新しい人材を迎える（しかも研修生として）のは、いつも小さな緊張があります。相手がインターンだと、こちらから与える一方と思われがちですが、彼女たちからいただいたものはじつに大きく、ぼくたち應典院スタッフにとっても大きな収穫となりました。

彼女たちは全身「問い」です。職場の決まりごとから、應典院の活動の目的やら理念まで、何でも直截に尋ねてくる姿は、いいかえれば應典院の日常の検証に値するものでもありました。ときには虚をつかれ、答えに窮した経験も。

3年と半年、なんとなく落ち着いたような気分になっていた應典院に対する、それは揺さぶりであり、異文化であったともいえます。

他者を受け入れることで、世界は生まれ変わる。そんなことを感じさせられたインターン体験でした。なお、両名とも今後も引き続きボランティアスタッフとして参加してくれます。

■関西経済同友会見学

應典院にはさまざまな見学者が訪れますが、去る9月26日、社団法人関西経済同友会のご一行が訪問、上場企業のトップクラスの方々約30名をお迎えしての見学会となりました。

これは橋爪紳也・大阪市立大学助教授がナビゲーターを務めて、大阪の話題のスポット?巡りの企画とか。全員でご本尊をバックに記念写真はやや面映ゆい感じもしましたが。

■芸術とヘルスケアの理事に

財団法人たんぽぽの家が中心になって準備が進められてきた「芸術とヘルスケア協会」（代表：播磨靖夫氏）が、この9月に正式に発足、私も理事のひとりとして参加することになりました。

この会は、「生命の、美の、優しさの恢復」をテーマに、これまでのような特権的な芸術ではない、別のアプローチを試みることを目的とするもので、アートと社会をつなぐ観点からも、ひじょうに興味深いものがあります。芸術と医療、福祉のみならず、宗教の接点も探っていきたいものです。

9月の東京での設立総会以降、早くも全国各地で記念フォーラムが開催されており、10月7日には、福岡フォーラムにゲストとして参加しました。今後、應典院寺町倶楽部との協力事業も考えられますので、どうぞご協力のほどお願い申し上げます。

■近畿青年の家協議会で講演

教育行政にかかわる方々との交流が進んでいますが、去る9月27日、近畿地区青年の家協議会の研修会で「生きる力、創る力」と題して、記念講演を担当しました。

青年の家とは、全国各地にあるキャンプ場などを併設した合宿型の社会教育施設で、国立をはじめ各自治体の教育委員会が運営、その担当職員の研修会に講師として招かれました。

應典院の活動を通じて、現代の青年の価値や意識について考えるところを述べたほか、おこがましくも、現在の社会教育に対する注文などもお話させていただいた次第。近畿一円からの参加者は大半が社会教育主事にあたる方で、講演後、焼肉パーティーをしながら親交をあたためました。

■ウォールギャラリー好評！

去る9月23日から10月1日まで、應典院ウォールギャラリー「クリン・もだん絵画展」を開催、大勢の来場者を迎えて盛況でした。

これは、應典院の壁面を使ったシリーズ展示会の第一弾で、鶴橋の聖公会生野センター絵画教室の、障害をもつ子どもたちの表現の世界が繰り広げられました。

持ち込み企画も歓迎ですので、あなたのご提案お待ちしています。

緋月真歩さんの人形個展を開催！

緋月真歩さんは独自の作風をもつ創作人形の作家として知られますが、このたび創作活動20年を記念して、11月20日から一週間、應典院で大規模な個展を開催されることとなりました。

もともと昨年の秋、寺子屋トークの講師としてお越しいただいた、ノンフィクション作家の野田正彰さんからご紹介いただいたことがご縁で、このたびの企画が実現、先行して19日のオープニングには野田さんのギャラリートークも開催されます。

緋月さんは、まったくの独学で人形づくりに取り組み、87年にフランスの公募展「サロン・ド・メ国際フィナール美術展」に入選、その妖艶な世界は観る者を不思議な世界へ誘う独特のものです。



應典院本堂がギャラリースペースとして利用されるのは、落慶の橋口譲二さんの写真展以来。本堂の光と影の中に浮かび上がる、たくさんの人形たちの競演が楽しみです。詳しくは同封のプログラムをご参照ください。